

ハイブリッドオーケストラ^{注-1} (3)

—高等学校の域を超える浜松学芸高等学校音楽科—

阿方 俊

「高等学校とハイブリッドオーケストラ」というテーマに違和感を覚える人がいるかも知れない。一般的に高等学校でオーケストラ活動をしているところは非常に少ないし、ましてやハイブリッドオーケストラと聞いては尚更のことであろう。

今月号では、その稀有な例として浜松学芸高等学校のハイブリッドオーケストラ活動を紹介したい。この高校には「普通科」と「芸術科」があり、「芸術科」には音楽、電子音楽、美術、書道の4課程が設置されている。音楽課程（実技はアコースティック楽器）と電子音楽課程（実技は電子オルガン）は、定期演奏会もそれぞれ独立して開かれている。そこでは、アコースティック楽器と電子楽器の相互乗り入れが当たり前のこととして行われている。音楽課程の定演ではハイブリッドオーケストラによるオペラハイライトが、また電子音楽課程では小さな編成のハイブリッドオーケストラによるアリアや管楽器などの協奏曲が演奏されている。



写真左は音楽課程の昨年の定演「魔笛抜粋」で楽器編成^{注-2}は以下のものであった。

管楽器	フルート×2、オーボエ×2（内1はフルートで代用）、クラリネット×2、ホルン×2、トランペット×2
打楽器	ティンパニー×1
弦楽器	第1バイオリン×3、第2バイオリン×2、ビオラ×1、チェロ×1
電子鍵盤楽器	第1および第2エレクトーン（弦楽器）、第3エレクトーン（ファゴット&トロンボーン）、クラビノーバ（チェレスタ）

注-1 筆者が使いはじめた造語で2002年度の昭和音楽大学研究紀要 No. 22 (46ページ) で用いた。電子オルガンアンサンブルとハイブリッドオーケストラの違いに言及

注-2 楽器編成および写真は宮本賢二郎教員からの提供

写真右は電子音楽課程の 2012 年度定演で取り上げられたモーツァルトのコンサートアリア「誰がわが恋人の苦しみを知ろう」で、楽器編成は次のものであった。

管楽器	フルート×2、ホルン×1
弦楽器	第1バイオリン×1、チェロ×1
電子 鍵盤楽器	第1および第2エレクトーン 第3エレクトーン

ハイブリッドオーケストラの形態と規模はいろいろあるが、魔笛の場合のように 22 名の奏者によるものは大型に属する。

これに対して、コンサートアリアの方は 8 名で中型のハイブリッドオーケストラといえよう。

演奏者について、「魔笛抜粋」ではバイオリン、チェロ、ホルン、オーボエ、トランペットに卒業生と教員が一部加わり、歌手としては「魔笛抜粋」の男声主役を卒業生と教員、コンサートアリアのソプラノを卒業生が歌っている。

オペラやコンサートアリアのような高度なテクニックを要するものを定期演奏会で取り上げ、高いレベルで上演するためには当然のことであり、定期演奏会の一部をアコースティック楽器と電子楽器の枠を超えた共演と共に学生、卒業生、教員が一体となった定期演奏会のあり方は、今後の音楽高等学校のあり方の一つを示唆するものである。

総合芸術としてのオペラ「魔笛抜粋」で舞台美術を担当したのが美術課程の学生と関係者であり、ここでは音楽と美術の共生が行われている。これもこの学校のアイデンティティのひとつとなっている。

これらの活動の延長線として、このハイブリッドオーケストラ活動が、浜松出身の音楽家を巻き込んで、ライオンズクラブから招待を受けピアノコンチェルトやオペラアリアのコンサートに結び付いた。



写真左は、メンデルスゾーンのピアノコンチェルト（ピアノソロ、前田勇佑教員）写真右は、藤原歌劇団のバリトン歌手、牧野正人ほかによるトークとオペラアリア。指揮はいずれもこれらハイブリッドオーケストラ関連の活動を企画し牽引している宮本賢二郎教員。

今年度の定期演奏会では、電子音楽課程は 7 月にジャズアンサンブル、音楽課程は 9 月にオペラ「カルメンハイライト」を予定していると聞く。これら一連の動きは、まさに音楽高校のイメージをはるかに超えるものであり、浜松学芸高等学校芸術科の音楽高校の枠を超えた更なるチャレンジと今後に期待したい。

（あがた・しゅん 本研究会員）

関連写真



浜松グリーンライオンズクラブ：メンデルスゾーンのピアノコンチェルト。ピアノ／前田勇佑 指揮／宮本賢二郎



浜松グリーンライオンズクラブ：牧野正人ほかによるトークとオペラアリア。指揮／宮本賢二郎



浜松学芸高等学校定期演奏会 魔笛ハイライト舞台



同上オーケストラピット。左奥にエレクトーン